

関西民放クラブ活動だより

コロナ禍の中の同好会活動

森岡 啓人(YTV)

新型コロナウイルスの猛威に見舞われた昨年の同好会活動は、大変な試練に晒されました。緊急事態宣言が発令された4月以降は、わずかに「俳句」と「川柳」のみが、3密を回避のため事務局に参集せず、「投句」の形で活動を継続しました。

月2回の開催ですから、世話人の負担は並大抵のものではありません。しかし、こうした煩雑さを厭わない尽力が、同好会活動の沈滞を防いで来たものと思います。個々の同好会という枠を超えて、ホームページ上に開設された「徒然なるままに」が果たしている貢献も、大きなものがあります。

4月末の開設以来、10月末までに30本を超える投稿がありました。そして、ここにもホームページ委員会の橋本安弘委員長の尽力がありました。

5月末に緊急事態宣言が解除されて以降、活動を再開する同好会が徐々に増えて来ました。6月に

は「太平記」「絵画」が再開され、「黒豆」も予定通り、苗の定植が

実施されました。7月には「囲碁」が再開、世話人の皆さんの多くは、コロナの動向に加えて、異常な猛暑を考慮に入れざるを得ず、再開時期をどうすべきか、苦慮されていたと思います。

暑さが収まった10月からは、「写真」「コーラス」が再開されました。

殊に、ウイルスの飛沫拡散の恐れが拭えない「コーラス」が再開された事は、ある意味画期的でした。また、10月中旬に「黒豆」収穫作業と「写真」撮影会のコラボ企画が実施された事は、同好会活動の新たな試みでした。

11月には、昨年度初めてとなる「ゴルフ」と「散策」が実施されました。

12月には「落語」も再開されましたが、「クラシック」「カラオケ」「英語」「メディア・ウォッチング」等々、休会を余儀なくされている同好会が、まだまだあります。一日も早い全面再開を祈るばかりです。

昨年は豊作でした・

丹波の黒豆栽培

上村十三子(MBS)

昨年は天候に恵まれませんでした。7月の除草作業の時は、前日まで雨が降り続けていたため、午前中で終わるはずの作業は3時まで終わらず、お昼も抜きでみんなへとへと。長靴をはいた足も、軍手をはめた手もドロドロです。

10月はいよいよ枝豆の収穫です。朝から雨は降りつづけ、みんな長靴に合羽スタイルで黙々と作業。でもうれしいことに昨年の黒豆はかつてないほどの豊作。一本抜くと枝豆がぎゅっしり鈴なりにぶら下がっています。豆はぷっくりと大きく、思わず歓声が上がると見事な出来栄です。

半分の黒豆はそのまま畑に残し、12月の黒豆の収穫のためにもう少し成長させます。

枝豆は人数分山分けし持ち帰りますが、一人5キロ余りにもなりませんでした。新鮮なうちに湯がいておかないと味はどんどん落ちますので、自宅での作業も必死です。冷凍しておけば味も落ちませんので、毎日、黒豆とビールの楽しみが続きます。

「ああ、これだから黒豆の栽培はやめられない！」

関西民放クラブの「丹波黒豆栽培の会」は、今回で、21年目を迎えました。

兵庫県三田市の農家さんに畑を借り、6月に苗植え、7月に除草と追肥作業、10月には植えた黒豆の半分を刈り取り枝豆を、12月には黒豆を収穫します。現在18人が会員です。平均年齢80歳？

今回は写真同好会のメンバー数人が参加して収穫風景や、のどかな田園風景を撮影しました。

